

## 当院における Brugada 症候群に対する substrate ablation の成績

陸 脩郎 因田恭也 須賀一将 古井宏一  
中込敏文 間宮慶太 岡本均弥 藤井亜弥  
柳澤 哲 柴田 玲 室原豊明

Brugada症候群に対するカテーテルアブレーションは、徐々に症例が集積されつつあるが、その長期予後については不明である。本研究の目的は、名古屋大学医学部附属病院でアブレーションを行った Brugada症候群について、その詳細を報告することである。当院ではこれまでに18例の Brugada症候群に対しアブレーションを行った。症例はすべて男性で、19～68歳、全例に植込み型除細動器(ICD)が装着されており、心室細動(VF)ストーム、ICD作動頻回、心室細動易誘発性などの背景があった。全例心内膜側には遅延電位を認めず、心外膜アプローチにて治療を行った。右室心外膜側遅延電位を確認し、ピルシカイニド負荷を行った後、これらをすべて消滅させることをエンドポイントに高周波通電を行った。通電範囲は広範で、通電時間は30～60分間であり、重篤な合併症は認められなかった。通電後18例中16例でVFの誘発ができなくなった。術後の心電図は15例でST正常化が認められた。フォローアップ期間は現在まで3カ月～7年で、抗不整脈薬を継続しているのは3例であり、VF発作の再発を認めたのは3例であった。Brugada症候群に対する心外膜アブレーションは、長期の発作抑制に有用である可能性が示唆された。

**Keywords**

- Brugada 症候群
- 心室細動
- 心外膜アブレーション

名古屋大学大学院医学系研究科循環器内科学  
(〒466-0065 愛知県名古屋市昭和区鶴舞町65)

*Catheter Ablation in Brugada Syndrome at Nagoya University Hospital*

*Shuro Riku, Yasuya Inden, Kazumasa Suga, Koichi Furui, Toshifumi Nakagomi, Keita Mamiya, Hiroya Okamoto, Aya Fujii, Satoshi Yanagisawa, Rei Shibata, Toyoaki Murohara*